第三章　玉鬘の物語　玉鬘と鬚黒大将

［第一段　鬚黒大将、熱心に言い寄る］

大将は（だいしゃうは、尚侍君に懸想している大将は）、この中将は同じ右の（藤中将が同じ右近衛府の）次将なれば（すけなれば、次官なので）、常に呼び取りつつ（官舎では常に呼び寄せて）、ねむごろに語らひ（熱心に尚侍君との縁談を相談し）、大臣にも申させたまひけり（内大臣にも中将から自分を推薦させなさっていました）。

人柄もいとよく（人物に難が無く）、朝廷の御後見となるべかめる（政府の重鎮と成り得る）下形なるを（したがたなるを、資質があるのを）、「などかはあらむ（尚侍君の婿に何の不足も無い）」と思しながら（と内大臣は御思いになりながら）、「かの大臣のかくしたまへることを（源氏殿がこうとお決めになった尚侍就任を）、いかがは聞こえ返すべからむ（どうしたら反対申せようか）。*さるやうあることにこそ（あの大臣は君を自分の物にしようという下心があって、そのように事を運んでいることだろうし）」と、心得たまへる筋さへあれば（承知なさっている話の筋さえあるので）、任せきこえたまへり（内大臣は君の出処進退を源氏殿に任せ申しなさっていました）。　*「さるやうある」は注に＜『集成』は「玉鬘を源氏のものにしておきたいのだろうと、内大臣は邪推している」と注す。＞とある。「心得たまへる筋」は第一章第七段で、源中将が源氏殿に内大臣の考えとして詳しく述べていた。

この大将は、*春宮の女御の御はらからにぞおはしける（東宮の母君である承香殿女御の弟君でいらっしゃいます）。　*「とうぐうのにょうご」は＜鬚黒右大将は、朱雀院の承香殿女御で東宮の母女御と姉弟。＞と注にある。藤原右家筆頭。

*大臣たちをおきたてまつりて（太政大臣と内大臣を除き申せば）、さしつぎの御おぼえ（それに次ぐ帝の御信任が）、いとやむごとなき君なり（とても厚い高官です）。年三十二三のほどにものしたまふ（年齢は三十二、三歳でいらっしゃいます）。　*「おとどたちを～」は＜源氏太政大臣、内大臣に次ぐ第三の実力者。＞と注にある。

北の方は（奥方は）、紫の上の御姉ぞかし（紫の上の姉君なのです）。式部卿宮の*御大君よ（それも式部卿宮の御長女です）。年のほど三つ四つがこのかみは（年が大将より三つ四つ上なのは）、ことなるかたはにもあらぬを（特に問題ではなかったが）、人柄やいかがおはしけむ（性格に難がお有りなのか）、「*嫗（おうな、老女）」とつけて心にも入れず（と名づけて気に入ることなしに）、いかで背きなむと思へり（どうにかして別れたいと思っていました）。　*「おんおほいきみ」は＜貴人の長女の敬称＞と古語辞典にある。

*その筋により（そうした奥方への義理もあって）、六条の大臣は（源氏殿は）、大将の御ことは（大将を尚侍君の結婚相手としては）、「似げなくいとほしからむ（縁故筋が悪いし家庭内の不和が懸念される）」と思したるなめり（と御思いになっているようでした）。　*「その筋」は注に＜鬚黒の北の方が紫の上の異母姉という関係をさす。＞とある。

色めかしくうち乱れたるところなきさまながら(大将は多情でだらしなく遊び回る性格ではないのに)、いみじくぞ心を尽くし*ありきたまひける(尚侍君に対しては非常に熱心に求婚を働きかけなさいます)。　*「ありく」は＜歩く＞だが、今でも「歩き回る」は＜動き回る、立ち回る＞の意味で、この「歩く」は＜求婚を手を尽くして働きかける＞という語感。

「かの大臣も(実父だという内大臣も)、もて離れても思したらざなり(私を問題外とは思っていらっしゃらないようだ)。女は(尚侍君自身は)、宮仕へをもの憂げに思いたなり(宮仕えを気乗りしていらっしゃらないようだ)」と、うちうちのけしきも(それぞれの内心も)、さる詳しきたよりあれば(藤中将という事情通がいるので)、漏り聞きて(聞き付けて)、

「ただ大殿の御おもむけの異なるにこそはあなれ(ただ源氏殿の御意向だけが違っていらっしゃるようだ)。まことの親の御心だに違はずは(実の親の御意向にさえ違わなければ、話はまとまる筈だ)」

と、この*弁の御許にも責ためたまふ(大将は仲介役の弁の御許という女房に頻繁に手紙の取次ぎを催促なさいます)。　*「べんのおもと」は注に＜玉鬘付きの女房。鬚黒との手引をする。『集成』は「「この」は、かねてから仲立ちであることを自明とした言い方」と注す。＞とある。「弁の御許」という言い方は＜弁官の奥方＞だから、親戚縁者に弁官のいる者なのだろう。

[第二段　九月、多数の恋文が集まる]

長月にもなりぬ(九月になりました)。初霜むすぼほれ(初霜が降りて)、艶なる朝に(風情のある朝に)、例の(いつものように)、とりどりなる*御後見どもの(各係りのお世話女房たちが)、*引きそばみつつ持て参る御文どもを(袖に隠して持って参じる懸想文類を)、見たまふこともなくて(尚侍君はお読みなさることもなく)、読みきこゆるばかりを聞きたまふ(女房たちが読んで聞かせ申すのをお聞きになります)。　*「おんうしろみども」は注に＜玉鬘のお世話役の女房たち。恋文の仲立ちをもしている。＞とある。　*「引き側む」は＜側に引き寄せる＞だから、ピタッと体に押し当てて＜袖で隠す＞のだろう。

大将殿のには(大将からの手紙には)、

「なほ頼み来しも(今なお求婚しますが)、過ぎゆく空のけしきこそ(お返事の無いまま過ぎてゆく月日を思うと)、心尽くしに(気が揉まれて)、

数ならば厭ひもせまし長月に、命をかくるほどぞはかなき」(和歌 30-05)

ただの長月ならぬ難が付き、ならば名が尽き」(意訳 30-05)

*注に＜鬚黒から玉鬘への贈歌。「長月に命を懸くる」とは、九月が帝への出仕や結婚を忌む月で、それを当てにしているので、という意。『完訳』は「「--ば--まし」で、人並ならぬ恋の思いを裏返しに表現。下句は、九月だけを頼みとして生命をかける意。切実な心情語による表現で、兵部卿宮の歌とは対照的」と注す。＞とある。歌筋は「一

角の者なら忌月なので避けるはずのこの九月に今月を限りと命懸けで求婚する私の身分の切なさ、を汲んで下さい」だから、真剣さを訴えているのかも知れないが、自分の都合だけを言い張っているようにも見える。

（とあって、）「月たたば(来月になれば、出仕する)」とある定めを(となっている決定を)、いとよく聞きたまふなめり(しっかり調べていらっしゃるようです)。

兵部卿宮は、

「いふかひなき世は(言っても仕方の無い御宮仕えの決定には)、聞こえむ方なきを(今さら反対も出来ませんが)、

朝日さす光を見ても玉笹の、葉分けの霜を消たずもあらなむ　(和歌 30-06)

朝日を受けた葉の裏で、名も無い霜は涙する　(意訳 30-06)

*注に＜蛍宮から玉鬘への贈歌。主旨「消たずもあらなむ」。「なむ」願望の助詞。私を忘れないでほしい。「朝日さす光」を帝の恩寵に、「玉笹」を玉鬘に、「霜」を自分自身に喩える。朝日を受ける玉笹（帝の恩寵を受ける玉鬘）と朝日に消えようとすえる霜（自分）を対照的に歌う。「玉笹の葉分に置ける白露の今幾世経む我ならなくに」（古今六帖六、笹、三九五〇）を踏まえる。＞とある。上と下を対比させて、帝と親王の歴然たる身分の違いを自覚している穏当な歌なのだろう。ただ、「たまざさ」の語用の意図は不明だ。「ささ」は「酒」のことをいう女房言葉ともあるので、祝宴の美酒と失恋の涙という定番の悲劇の構図なのかも知れない。また、「葉分け」には＜数多くの求婚者の一人＞という控え目な語感と、その謙虚さを印象付けようとする計算も見えるので、その為に用いた＜笹の葉飾り＞なのかも知れない。だとすると、こうして潔く身を引くのも一種の余裕だが、先を見て好印象を与えて置こうという思惑もあると言うか、良い人ぶる習性と言うか、そういう人なのだろう。何しろ、帝相手では勝ち目は無いので今回は引き下がるが、親王なればいつかは親密になる機会があるかも知れないのだから。

思しだに知らば(少しでも気にして頂けたら)、慰む方もありぬべくなむ(この失恋の慰めようもあるかと思います)」

とて、いと*かしけたる*下折れの霜も落とさず持て参れる御使さへぞ(ひどく萎れて茎の折れた笹の葉の霜も落とさずにそれに結び付けて手紙を持って参じた宮の文遣いまでが)、うちあひたるや(同じように疲れた様子でしたこと)。　*「かしく」は「傾く」の語感で＜萎れる、衰える＞という意味で＜失意＞を表しているのだろうが、同時に「畏む(かしこむ、恐縮する)」に通じる謙虚さの演出ではありそうだ。*「したをれ」は＜折れて垂れ下がっている枝＞と古語辞典にある。

*式部卿宮の左兵衛督は(式部卿宮の子息の左兵衛府長官は)、*殿の上の御はらからぞかし(六条院の正夫人のご兄弟なのです)。*親しく参りなどしたまふ君なれば(気軽に六条院に出入りなさる貴君なので)、おのづからいとよく*ものの案内も聞きて(自然と姫の尚侍就任の運びの事情も聞き知って)、いみじくぞ思ひわびける(非常に落胆しました)。　*「式部卿宮の左兵衛督」は注に＜式部卿宮の子息。源氏の北の方紫の上の異母兄弟。初出の人。＞とある。「左兵衛督(さひゃうゑのかみ)」は左兵衛府の長官で＜従四位下相当官だが、中納言や参議で兼ねる者が多い＞と古語辞典にあり、であれば従三位の高官であり、29 歳の紫の上よりは年長の 30 代の可能性が高い。が、不明。　*「とののうへ」は「紫の上」だが、右大将の北

の方の説明には「紫の上の御姉ぞかし」とあったので、女の身分の説明は本人の血縁で示し、男の身分の説明は社会的地位関係で示す、という意識を感じさせる語り口だ。　*「したしく」とあるが、これが良く分からない。紫の上を親しく訪ねるとしたら、上に男を近付けない源氏殿にしては稀な対応で、上の情報元としても稀有な存在だ。が、そんなことを殿が許すだろうか。また、殿自身としても何かと隔たりのある式部卿宮との伝手として利用価値はありそうだが、同時に此方の手の内が相手に漏れることを恐れれば、そうは打ち解け切れないのではないか。だから、適当に泳がす、くらいの構えだったかと思う。そういう殿の姿勢を窺う六条院の家司や女房たちは、左兵衛督に愛想が良かっただろう。正夫人の血縁者であり、政府の高官であり、源中将から見ても先輩軍人であり、つまり表立った敵が六条院には居ないのであり、詳しい記事は皆無で具体的にどこまで許されていたのかは不明だが、恐らく左兵衛督は邸周りには気楽に出入り出来たに違いない。　*「もののあない」は＜姫が出仕するという動向＞らしい。

いと多く怨み続けて(文面でもそれはそれは嘆き言を続けて、歌はこうあります。)、

「忘れなむと思ふもものの悲しきを、いかさまにしていかさまにせむ」(和歌 30-07)

「忘れることが幸せと、出来ないだけに思い込む」(意訳 30-07)

*注に＜「忘るれどかく忘るれど忘られずいかさまにしていかさまにせむ」（義孝集、一九）。『完訳』は「下句の反復に、無力な自分にいらだつ気持がこもる」と注す。＞とある。「義孝集」は藤原義孝(954-974、21 歳で早世した中古三十六歌仙の一人)の家集、と Wikipedia などにある。本歌は思いのままだけに、今の歌のように色あせない。当歌は少し理屈っぽい。意訳はもっと理屈っぽい。

紙の色、墨つき(墨の濃淡や筆遣い)、しめたる匂ひも(焚き染めた香りも)、さまざまなるを(取り取りに思いが込もっていて)、人びとも皆(女房たちも皆)、

「思し絶えぬべかめるこそ(姫が出仕なさると、貴君たちの懸想が途絶えてしまうのが)、さうざうしけれ(寂しいことです)」など言ふ(などと言います)。

宮の御返りをぞ(兵部卿宮への御返事だけは)、いかが思すらむ(どういう気が向きなさったものか)、ただいささかにて(ただ歌の一首のみですが)、

「心もて光に向かふ葵だに、朝おく霜をおのれやは消つ」(和歌 30-08)

「日向が似合う葵でも、下葉あっての映くしさ」(意訳 30-08)

*注に＜玉鬘から蛍宮への返歌。「朝」「光」「霜」「消つ」の語句をそのまま。「玉笹」を「葵」に置き換えて、自分を「葵」に、宮を「霜」に喩え、「己やは消つ」（反語表現。どうして私が消したりしましょうか）と切り返す。＞とある。「心もて」は＜心を以て→意志を持って→自ら進んで＞という言い方のようだ。葵(あふひ)はフタバアオイ・賀茂葵だろうが、この草だけが特に日向を好んで生える、という認識はあるのだろうか。印象で言えば、やはり葵祭で髪に飾った葵の葉が日の光に映えることを言っているように見えて、「心もて」は葵自体が「光に向かふ」のではなく、斎王などが「心もて(飾り立てて)」葵を「光に向かふ(日に映えさせる)」という言い方に思える。だからこそ、それでも葵自体は「己やは消つ(本来の瑞瑞しさを失わない)」という筋が立つ、かと思う。そういう歌筋の情緒で＜あなたの好意は忘れません＞と応えたのだろう。

とほのかなるを(とうっすらと書いてあるのを)、いとめづらしと見たまふに(宮は珍しくご返事があったと御覧になって)、みづからはあはれを知りぬべき御けしきに*かけたまひつれば(姫ご自身は宮の好意を分かっているような御様子で詠んでいらっしゃるので)、つゆばかりなれど(霜の歌だけに露ばかりではあるが)、いとうれしかりけり(それは嬉しいものでした)。　*「かく」は＜口に出して言う＞だから、此処では＜詠む＞だろう。

かやうに何となけれど(こうして出仕することに変わりは無いものの)、さまざまなる人びとの(いろいろな人びとから)、御わびごとも多かり(御嘆き言が多くありました)。

女の御心ばへは(女たるものの御心掛けは)、この君をなむ本にすべきと(花ともてはやされながら円満に事を収めた、この尚侍君を以て手本にすべきと)、*大臣たち定めきこえたまひけりとや(両大臣はお褒め申していらっしゃったとか)。　*「おとどたち」は源氏殿と藤原殿で、両者が対の姫の尚侍就任ということで合意し納得し合った、ということを意味する文のようで、特に藤原殿が、いろいろ事情はあるにせよ、この筋で了承したということは注目すべき記事かと思う。

(2011 年 7 月 31 日、読了)